

『私は騙されている』

鉄線

あやつがひよっこり、私の家の前を通りかかったのは半年前の秋である。よそ者なのか、初めて見る顔である。人見知りか激しく、それから幾度となくすれ違ってもあやつは曲がなかったが、最初に現れた時からしなやかな独特の雰囲気を感じながら、しかも、私のことを意識しながら歩いているのは何となくわかった。遠くから私のことをちらりちらりと盗み見ているかと思いきや、音もなく忍び寄り見つめている時もあり、その距離感には実に思わせぶりであるし、計算されたというよりは本能に因るものという思いがした。自分に近づいてくるものは良きにつけ悪きにつけ気になるもので、あやつのこと例外ではなかった。とにかく、あやつは自分本位で気まぐれでぶっきらぼうだったが、切れ長の目、寡黙、色白というのは私の好みだったから、私にとってもあやつは初めて現れた時から確かに気にかかる存在だった。

季節は春になり、あやつはひよんなことから私の部屋で寝泊まりするようになった。最近では静電気のごとく肌をすり寄せ、スキンシップを欠かさない。毎晩、私の部屋でりの字になって寝るのだが、昨夜などは私の布団の中に潜り込んできて、なかなか寝かせてくれないで参った。体や肌を合わせる事によって互いの親密感を高め、私の心をつち掴もうとしているのだろうか。大胆にも甘噛みのおまけ付きである。相変わらず自分本位で気まぐれで、自分の都合で現れたり、いなくなったりする。あやつは肉よりも魚を好み、食欲旺盛である。いつ何時、あやつが腹を空かせて戻っても、私はそれなりに空腹を満たすことができるよう食材をストックしている。自分でも何てお人好しとわかつてはいるものの、出したものを文句も言わずにきれいに平らげてくれると、この上なく嬉しいものである。あやつは口ほどにものを言い、仄かに青みがかった澄んだ瞳にじっと見つめられると、胸がきゅつとなり鼓動が乱れる。半年の間に少しづつ、そして、確実に私との距離を縮めてきたあやつは、私の中で何ものにも代えがたい存在に変化しつつあった。

二つの物事に同時に働きかけること、かわりを持つことを二股と言う。とりわけ、二人の恋人と同時交際というかわりを持つことで多用される言葉であるが、今時では三股、四股、五股…、タコ股などというかわりを表す言葉もあるようで恐れ入ってしまう。私はいまだ二股を掛けたことはないが、二股を掛けられているのではないか、と思うことがある。あやつは寝顔を見ていると、もしかしたら私は騙されているかもしれない、と脳裏を過ぎるのである。あやつが私の家で寝泊まりするようになってから、あやつが家を空けている時の行動が気になって仕方がない。人は好きになるほど束縛や嫉妬が強くなる傾向にあるが、あやつも他に寝泊まりしている家があるのではないか、ご飯を呼ばれている

家があるのではないか。あるとしたら、どちらが本命彼女で、どちらが都合の良い女なのだろうか、と考えてしまうのである。鼻くそや耳くその形をした超小型のGPSがあるなら、あやつが爆睡している間にこっそりと取り付けたいとさえ思う。私が本命であることを確認できたならそれでいいのである。必ず戻ってくるという確信さえ得ることができたら、外で幾らやんちゃされても気にならないのである。

見えない部分を見たい、把握したいという思いに駆られることはおかしいことではないと思っている。子どもの頃、太陽が地平線の下に沈んでから昇るまで、何をして過ごしているのか見てみたいと思っていたが、世の中にはあえて全てを把握してしまわないほうが幸せであり、夢があるということが案外多いのかもしれない。もしかしたら、私はあやつに騙されているかもしれないし、都合の良い女かも知れない。あやつにとって私が無二の存在かどうかはこの先、どれほどの月日をあやつと過ごしても聞くことはできない。聞くことはできないが感じ取ることはできる。あやつの可愛さに盲目になり、私は感じ取ることをすっかり忘れてしまっていた。あやつは自由気ままに生きている。それはこれから変わらないであろうし、束縛するつもりは微塵もない。私との今の暮らしはただの通りすがりで、季節が変わる頃には終わっているかもしれない。私はあやつに騙されているかもしれないと思いつつ、このごろでは騙されていてもかまわないと得心している。太陽が地平線の下に沈んでから昇るまでのことは、モグラに任せておけばいい。いつの時代も一本人気でお人好しの私ができることは無償の愛を注ぐことだけ。あやつの名はシャドー。野良猫で、今も私の部屋で体を丸め、昏々と寝入っている。(了)